

## 地域・子ども・大人の「関係をつなぐ」(2)

お話 小川 清実

親が「ぼそつ」という一言を大切に掬い取る

小川 『びっぴ』にいらしているお母さんは、こういう場所があると、保育士が「何もしない」でも、本当に親子で変わっていくの。「何もしない」というのは、直接的に「こういう子育てがいいですよ」というアドバイスを一方的にしていけないという意味です。ただ、お母さんのほうから、ご相談というか……、多分、ご相談という

気もないわね。「最近、こうなんだけど」とか、「この間、お医者さんに行ったら、こう言われたのだけど」とか、「ぼそつ」と言ってみる。

例えば、間もなく一歳になる子がいて、「お医者さんに、もう母乳だけじゃなくて離乳食を始めないと、ピタミンが足りませんよって言われたんですよ」と。「えっ、ほかのものを、まだ何も食べさせていないの？」と聞くと、「はい」とか言うわけ。(笑)「歯、生

えているでしょう？」と聞くと、生えているの。「果汁を薄めたのは？」「あげても、べって出しちゃうし……」。だから、一日に十何回も母乳をあげてるのですつて。ちよつとそれは……。〔笑〕「ええつ？」つて、こちらがびつくりするようなことが、実はいっぱいあるの。

もう一歳になるのに、子どもを一度も床におろしていないという親がいる。つまり、ずつと抱っこしているの。それで、その子の足が、障がいもないのに、ぶらんぶらんなの。

—— はいはいもしていない？

小川 していないの。はいはいの大切さとか、離乳食で口を使うとか、そういう大切さというのは、多分、知識ではあると思うけれども、もう一方の知識があるのよ。

例えば、母乳はいいとか。それに、けがをさせたくないという心配もあるのね。そういうことで、どうしてずつと抱っこできるのかわからないけれども、しているの。見ていると、じゅうたんに座つたら、子どもをじゅうたんにおろさずに、やつぱりびざの上へのせちゃうわけ。

—— 子ども本人も動かない？

小川 動こうとしない。

—— どうするのだろう？

小川 そうなの。とつても大変なことでしょう。でも、親にそうは言えないから、例えば、食べさせていないという親には、「菌も生えているし、口で噛み噛みすると、脳への刺激があるから、離乳食を始めたほうがいいかもよ」とか言うわけ。そうすると、もう離乳食を始めている、同じぐらいの子どもをもっているお母さんが、「やつぱり朝晩は何かお腹に入れておくと、そんなにおっぱいを飲ませなくていいから楽よ」とか、言ってくるの。一日十何回も母乳をあげていたら、参るわよ。子どもだつて、十分に育つていかないでしよう。そのお母さんは「ああ、そう」と、聞いている。それでも、すぐに離乳食を始めるかどうかわからない。

親が自分で決められるように支える

小川 こういうことつて、焦っちゃいけないのね。小児

栄養の本を見ていたら、離乳を始めるのは「親の意識次第」だという事例が載っていた。親が始めようと思えば、始まると。だから、私が次にそのお母さんに会ったときに、親の覚悟次第だという事例を出して、「ここに、こんなのが書いてあるわよ」と、見せたら、「ああ、そうですね。覚悟ね」と言って。そうしたら、その次に会ったときに、「始めましたよ」と、言ってくれて。

(笑)

だから、お医者さんが「ビタミンが足りないよ」と言っても始めないの。今、そういう親たちなのね。今のお母さんたちって、「何がいいですよ」というのは、お医者さんが言うことで、「それをそのまま信じようとは思わない」のね。

—— 医者を信頼していない？

小川 信頼していないというか、「でも、まだいいじゃない？」という……。今、情報が本当に過多でしょう。いろいろな意見を言う人がいるわけでしょう。

—— この保育士さんや教員スタッフに私が言っているの

は、「絶対にこうしなさい」と言っても、親は聞かない。自分の子育てのやり方は、親が決めていかなきゃいけない。だから、決めていく、そのちよつとしたプッシュ、そういうお手伝いをしてあげるだけでいい」ということです。

今のお母さんたちには、もう情報は十分だから、あえてこれ以上要らないと思います。親が、そういうふうには、「ぼそつ」と言うのが、実はすごく大事で、「ぼそつ」と言っているけれども、もしかしたら、ずっと考えていることなのかもしれない。ずっと考えていて、でもお医者さんにも相談できないし、お医者さんから言われてはいるけれども、相談しない。保健所の保健師さんにも、特に相談しない。日常的には、相談しないでずっときてしまっているわけでしょう。

### 人との関り方を学ぶ出会いの場

小川 けんかをさせられない親もいます。「うちの子、すぐに手を出しちゃうんです」ってすごく悩むお母さん

がいます。自分の子ども、二歳になったばかりの男の子なんだけれども、(他の子のことを)遠くから見ているの。その子は人との関り方がわからないのね。別の親子が絵本を読んでいると、ドンって、間に割り込んできちゃうの。何も言わずにドンと入っちゃう。そうするとびつくりするけれども、「見るの?」と声をかけられて、一緒に見せてもらう。あるいは、もうちょっと小さい赤ちゃんとその親が、積み木を重ねて楽しんでいる。そこへ行って、自分がドンと壊しちゃうの。(笑) 本当に関り方を知らなくて、そうやって邪魔ばかりしている。だから、「とても公園にも連れていけないです」と、お母さんがいろいろ悩んでいるの。

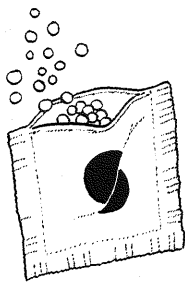
そのくせ、「うちの子は六つもおけいご事をしているんです。おけいご事のところでは、とてもいい子なんです」と言うわけ。「何をやっているの?」と聞いたら、「音楽教室、モンテッソーリ、その他いろいろで六つ」。「忙しいわね」って言うしかない。そんなことをしているから、どうやって人と関っていいかわからないのよ

と、直接は言えない。

その日、やっぱり邪魔ばかりしているから、同じような子どもに頭をボカんとやられたの。その子が泣いたのね。泣いてお母さんのところにくっついた。(母親に助けを求めて甘える)体験は、それが初めてだというの。

「でも、こういうやり取りがあつて、ほかの人間がいるということを学んでいくわけだから、恐れずに、とにかくここへいらつしゃいよ」と、言うしかないでしょう、おけいご事をやめなさいとは言えないから。

その方は何回も来て、だんだん変わっている。親も変わってきた。親は子どもと遊べないの。「お母さん、絵本を読んでほしいのかもしれないよ」とか言つて水を向けるけれども、自分の子どもを眺めているわけ。それで



「やっぱり親子の信頼関係って大事ですね」って言葉では言ってくる。「コミュニケーションって大事ですね」って。「そうですね」と……。



—— 情報過多の世の中で知識としては入っている、それが自分のものになっていかないのでしょうか。

小川 そう。でも六つのおけいこに行かせて、よく育てたいのよね。そのお母さんは私に会うたびに、「最近、慣れました。子どもがやつつけられていても、それも大事と思うようになりました」なんて言ってくれます。時々いらしているから、このまま何の経験もなく幼稚園に行かれたら、このお子さんは大変だったと思うけれども、ああ、よかったです……。

だから、とにかくいろんな親子が『びっぴ』のような場に参加してくれるということ、それも強制でなくて、いつでも誰でも歓迎という場になっていないといけない。だから、保育士さんたちも、どういう状態の人が来

ても、いつもにこにこして、そのままを受け入れていく。

家はずっといてビデオとテレビしか見ないお子さんも、おばあちゃんが連れてみえた。でも、それは本当によかったです。もう三歳にもなるのに、言葉が出ないの。でも、少しずつだけでも出てきている。だから、いろいろな子どもがいることは大事だと改めて思いました。

—— いろいろな出会いを通じて親が無意識に学んでいけるような主体性を維持し続けるというのがひとつの課題でしょうか。

小川 そうそう。絶対に「教えてあげるわよ」という姿勢はだめ」なの。「一緒に考えていこうね」というような姿勢」。

### 事例認識の効用

小川 だから、一度も床におろされていない子は、はいはいできるように、とにかく床におろしてもらわなきゃ

いけない。そのためには、ただ言葉で言っただけでは実行して下さるかどうか、心配なわけ。ところが、ここで同じくらいの子が、もうはいはいしていたり、歩いていたりするのを見ると、親は、「はっ」とするでしょう。親が床におろそうと思わなければ、その子は、自分の足でははいするチャンスもないわけだから。言葉だけではなくて、こういうふうに見るといふことがすごく大事で、そのことを私は、昔から「事例認識の効用」と言っているのだけれど、事例をいっぱい知れば知るほど、親というのは、子育てにおいて安心でき

る。そのかわり、悪い事例もあるわけです。悪い事例は悪い事例で、それを見るのも大事だと思うの。私は、ああいう親にはなりたくないなど、もしかしたら思うかもしれない。だから、いい事例だけでなく、とにかく、事実をたくさん知っていくことが親の安心感になる。親子がどういふ様子で遊んでいるかというのを見て、自分はどう関ったらいいかと学んでいける。

例えば、「子どもと全然遊べない親」もいる。それから、「どうして親が子どもと遊ばなきゃいけないのですか」と聞く親もいる。(笑) 赤ちゃんのときは、かわいくてずっと抱っこしていたけれども、その子はもう二歳で、どんどん自分で遊んじゃうから、「もうつまらない」という親もいる。「あまり見ようとしなない」という親もいる。

### 「子どもを知る」うれしい発見の場

小川『びっぴ』は、「親が子どものことを見ていてね」というのを一番お願いしています。「見ていてね」というのは、ただ危なくないように見ていてねというものもあるけれども、「子どもが、今、どうしているか」ということです。自分の子どものことを見るところは、家にいると、あまりしないのね。家事をやっちゃうから。だから、ビデオを見せたり、遊んでいなさいと言って、片づけものをしちゃう。

そうじゃなくて、ここでは「どうぞ見ていてください

ね」というのは、子どもがどんなことをしているかというの、見ていると何となくわかってくるからです。もちろん危ないときに補助をするというの必要だけれども、「うちの子がこんな小さい子と遊んでいる」とか、「うちの子って、こういうことができるんだ」という発見にもなってくれる。これは、親が意外にうれしいことのようなのです。

例えば、ほかの子どもと物の取り合いをした場合、一歳代の物の取り合いなんて、全然取り合いにもならないでしょう、「あ、持っていかれた」ぐらいでしょう。どうっていうこともないけれども、二歳ぐらいになると、ちよつと抵抗するでしょう。でも強い子は取っていく。そうすると、強くて取っちゃったほうの親は、「どうして取ったの？」という関りで見るし、取られちゃった子は、親が見ていないと、親のところに行く。そうすると、「今まで、うちにいても私に助けを求めてこない子が、助けを求めてきた」ということで、「かわいいわ」という感情がわいてくる。

だから、『ぴっぴ』へ行ったら、「こういうふうにはちゃんとてなきやいけない」というのじゃなくて、「とにかく自然に、家にいるのと同じような親子でいい」わけ。そして、お母さん同士が仲良くなつて、ここに来るだけじゃなくて、家が近ければ行き来してほしいなというのが願いです。別の言い方をすると、いつもここに来てほしくないのね。勝手に卒業していつてちょうだいな、というのが最高の願いなね。

### 絶対的な安心感が育む親子の関係

小川 二歳を過ぎた女の子が、親がすぐそばにいないと、ものすごくギャンギャン泣くの。どうしてかなと思つたら、そのお母さんが、「実は昨日、子どもをちよつと預けたのですよ」と。もつとも午後三時ぐらいになったら大分落ち着いて、親が少し離れても全然平気になつたけれども、それまでは、そばにいないと、すぐに「ママ！」って。それに対して「ママはここにいるよ」と。

ここの「ぴっぴ」の部屋の中は、「ママは絶対にいるという安心感」が子どもにあるから、子どももすごく安定しているの。絶対にどこへも行かない。トイレに行くのも、ママと離れたくない子は、行けるようにキーパーもあるし、絶対に離れないというのを子どもはわかっていますね。だから、泣いているときに、『「ぴっぴ」に行くよ』と言うと、泣きやむんですって。

—— ちゃんとそばにいて、自分と向き合ってくれる。

小川 そう。だから、親が自分と関って遊んでくれるというのが、子どももわかってくれている。つまり、それだけ家では関っていないの。それは、お母さんたちも言っていますね。家だと、何か忙しくて子どもと関れないけれども、ここは家事をすることはないから、「この時間は、ゆっくりと自分の子どもと関れる」と。それから、あるおばあちゃまがおっしゃったけれども、「ここにいと、孫に優しくなれる」と。だから、親もそうなのかもしれない。優しくなれる。子どももわかっているから、『「ぴっぴ」は楽しいところになる。親やおばあ

ちゃんに関ってくれて、とにかく一緒に遊んでくれて、親子でままごとをしていたりするわけ。

父親とやっていたりもするの。なかなかいいものです。土曜日は父親が多いし、普通の日でもみえる方があります。あのお父さん、子どもと遊んでいないように見えて、遊んでいるわと。そんなに堂々とはやらない。ちよつと恥ずかしいらしくて、ちよちよこと遊んでいるの。(笑)ああ、遊んでいると思ったり、今日は奥さんが仕事に行っていますといって、ご主人が子どもさんを連れてきたり。いろいろな形で、子どもにとつて『「ぴっぴ」がうれしいところになっています。(次号へ続く)

(東横学園女子短期大学)

聞き手 首藤美香子